

## 大蛇伝説 「大里峠」

昔、関川村の蛇喰（じゃばみ）に、炭焼きをしている「忠蔵（ちゅうぞう）」・「おりの」夫婦と娘の「波（なみ）」が住んでいました。ある日、忠蔵は山で襲ってきた大蛇を殺し、切り刻んで持ち帰り、樽に入れて味噌漬けにします。



忠蔵は樽の中を見てはいけないと厳命しますが、「おりの」は忠蔵の留守にそれを全部食べてしまいます。「おりの」は喉が渴き川の水を飲みますが、水面に写った自分の顔が蛇になっているのに驚きます。夫の言いつけを破ったことを詫びながら、「おりの」は上流へと逃げ失せてしまいます。

時が過ぎます。秋遅く盲目の法師の蔵市（くらのいち）は、米沢街道を通り故郷へ帰る途中に大里峠で夜になります。祠の前で休み琵琶を弾いていると、女が現れ再度曲を所望します。女は大蛇に化身された「おりの」で蔵市に身の上話をします。大蛇の体は大きくなり、ここでは狭くなったので、荒川の下流をせきとめ、村を大湖にして住む企みを打ち明けます。他言すれば命はないと告げて女は消え去ります。

蔵市は、夜道を急いで下山して下関の大庄屋「渡邊三左衛門」に急を告げ、「大蛇は鉄が嫌い」と明かした」と言い、琵琶と杖だけを残して絶命します。庄屋たちは村中の鉄を集めて釘をつくり、大里峠で大蛇に打ちこみます。大蛇は七日七夜苦しみつづけて退治され、村は救われました。下関の大蔵神社には、法師蔵市が遺した琵琶と杖が祀られています。

（大里峠伝説の言い伝えの一つ、編：平田大六）

## 渡邊三左衛門家 邸宅

渡邊家は、越後米沢街道の要衝下関に居を構えた、豪商・豪農の一族。75人の使用人を抱え、千町歩の山林と七百町歩の水田を有した。

その邸宅は国の重要文化財の指定を受ける築200年の豪邸。造りは強度が高い「撞木づくり」。屋根は「石置き木羽葺屋根」で玉石が約1万個、木羽（杉薄板）が20万枚使われており、その広さは日本一。

渡邊家は廻船業や酒造業で財をなし、三代目から米沢藩への融資（大名貸し）を行い幕末までに総額十万両以上を融資した。その功として勘定奉行格の待遇を受けるとともに、米沢藩九代当主上杉鷹山公から賜った「弾弓」は渡邊家の家宝として保管されている。



発行：越後米沢街道・十三峠交流会  
〒999-1337  
山形県西置賜郡小国町新原 124  
TEL・FAX 0238-62-5955

協力：米沢街道地域づくり検討会  
新潟県岩船郡関川村大字下関 904

※平成28年度やまがた社会貢献基金助成により作成

# 越後米沢街道・十三峠

鷹たかの巣す・榎えのき・大里おほり



大里峠に建つ地藏堂

## 十三峠(越後米沢街道)



# 越後米沢街道十三峠 越後三峠図

## 鷹の巣峠、榎峠、大里峠ガイドマップ



**(重) 渡邊邸**

**ふたえ 二重坂**

峠の頂の手前に「熊坂」と呼ばれる頂点がありその付近の呼称、林道と林道に挟まれており入口を通り過ぎぬように注意。

**無名戦士の墓**

戊辰戦争の折、激戦地となったこの峠で戦死した米沢、新発田の藩士の供養塔、この墓は関川村蛇喰地区にある弘長寺の住職と集落の人々によって建立された。



**大里峠**

- 山形県と新潟県の境の峠・大蛇伝説「大里峠」の舞台となった。
- 昔から地すべり地帯の難所といわれており、峠道が沢となってしまった箇所もあるので注意。

**地藏堂**

- 峠の頂上にあり、あたりは小さな平地となっている。
- 堂内には「地藏尊」「観音様」「大里大明神」が合祀されている。

新潟県関川村



**鷹の巣峠**

- 旧米沢街道の標柱が有る、十三峠の新潟側の入り口。
- 下川口側の峠口には「馬頭観音」や「庚申塔」などの石碑群があり往時が偲ばれる。

**榎峠**

- 越後三峠の2番目の峠。
- 現在の峠口は国道脇にあるが、かつては山裾を迂回する道があった。
- 頂上には如意輪観音像があり一里塚的な役割も果たしていた。

**はた 畑鉦山跡**

かつて200人を超す従業員がいた銅鉦山で昭和20年に閉山、かつて集落があった場所は、現在ではお墓などが数基佇んでいるのみ。

**大里峠**  
延長4600m  
標高 478m

至南陽市

山形県小国町